



TITLE:

<批評・紹介>楊啓樵著 揚開雍正皇帝隱秘的面紗

AUTHOR(S):

大谷, 敏夫

CITATION:

大谷, 敏夫. <批評・紹介>楊啓樵著 揚開雍正皇帝隱秘的面紗. 東洋史研究 2001, 60(2): 349-357

ISSUE DATE:

2001-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155378>

RIGHT:

以上、たいへん率直に筆者の考えを記す結果になった。著者の籠谷直人氏に出會つて以來、二十年が経つ。氏からは、たくさんの方とを學んだ。ともに研究する機会も與えていただいた。そうした氏に對しては、できる限り率直に自分の考えを書くことが何よりの御恩返しになるであらうと、身勝手に判斷した次第である。失禮の段、お許しいただきたい。

二〇〇〇年二月 名古屋 名古屋大學出版會

A5判 五〇五十一二頁 六五〇〇圓

楊啓樵著

揭开雍正皇帝隱秘的面紗

大谷敏夫

本書の著者楊啓樵氏は、現在姫路獨協大學教授であり、『雍正帝及其密摺制度』の研究で京都大學文學部から文學博士の學位を取得した清朝雍正帝研究の第一人者である。氏が雍正帝研究を本格的に始めたのは、一九六六年京都大學に留學し當時人文科學研究所で行なわれていた「雍正硃批諭旨研究班」に参加した時からであるがこの班を主催していた故宮崎市定博士、佐伯富博士の指導を受ける中で雍正帝が重視した密摺制度の實態について解明すること、それと共に雍正帝の即位にまつわる疑念が中國の研究者によって提示されていたところに注目しその事實の可否を検證しようとされたことによっている。本書はこの點について正面から取りあげ、なかば定説化していた雍正帝の帝位篡奪説を批判し、その繼位の正當性を立證した力作である。本書の構成は、第一類繼位、第二類私生活、第三類紅學と雍正史、第四類小説と雍正帝、第五類原始檔案の五類からなっている。まず前言でそれぞれの概略をのべているが、これをみれば本書の意圖するところが要約されており、大變わかり易い内容になっている。以下この前言をもとに本書の主題について解説していこう。

第一類繼位については、一九八一年十一月出版の著作『雍正帝及其密摺制度研究』（香港 三聯書店）第三章「清世宗纂位說平議」

において、各家の篡位説に對して異議を提出したものの雍正嗣位の合法性立證が今一つ不十分な内容であつたのでこの點を明言することにあつたという。氏は先著出版後この問題について研究を重ね、一九八七年十一月『史林』七〇巻六號に「雍正篡位再論」と題して論文を公表されたが、その結論としては「雍正篡位」は千古の疑案にならんとしている。現在の史料に基づけば解決のしようがないのであるとのべている。ここから氏はこの問題をとく鍵として新資料發掘に情熱を注ぐことになるのである。ここに氏が注目した新資料として『宗室玉牒』があつた。これについては後述するが、氏は本書の中で雍正嗣位の合法性を明らかにすることに力點を置かれたように思われる。氏によれば康熙は雍正が大業を嗣ぎ允禩を輔弼させることを望んでいたというものであり、ここから康熙が生前遺詔を立てなかつたことを根據として雍正と允禩との間に儲位爭奪があつたという見方は當らないというのである。この點を明らかにするため氏は康熙時代は滿洲貴族分權形態が依然存在して、康熙の晩年に於ても太子の廢立の不安狀態が諸子野心を引起すことになつたのを憂へていた康熙が次の皇帝として雍正に繼位させることをきめていたという大膽な結論を提示された。すなわち康熙は皇太子の中から品行があり政治能力を有する皇位繼承者として雍正を内定し、別の有力な候補者であつた允禩にはその軍事的才能をみこんで撫遠大將軍として雍正を輔弼させるべき構想をもつていたと考える。このような氏の觀點は既に前記『史林』誌上に一つの假説として提示されていたのであるが、本書ではその説を確信をもつて學界に提示されたといえよう。しかし氏にはやはり學界でかの孟森以來ほとんど定論となつていた篡位説と相い向かわねばならなかつた。前述の書

でも孟森、王鍾翰、金承藝といった著名な學者の篡位説に疑問を呈していたが、本書ではその疑問點を一層鮮明にして篡位がなかつたと強調する。すなわち孟森がその著『清世宗入承大統考實』の文中で『實錄』では雍正繼位が末命に出て、口述遺言となつてゐるが、『大義覺迷錄』では遺詔となつており矛盾している點に疑問をもち篡位説の理由としてゐるのに對し氏は口頭の遺言も一たび筆録をもち遺詔となるものであるとのべ、篡位説の理由にならないという。

次に王鍾翰の著『清聖祖遺詔考辨』の中で、王氏が中國第一歴史檔案館の清聖祖康熙帝遺詔原件について清代各種の官書を以て校勘した結論として「聖祖遺詔は偽造されたものであり、これも亦世宗篡位増添の一つの歴史文獻物證をなす」とされたのに對し氏もこれを閲覽してその學術的價値を認めつつも王氏が對比した官書が康熙五十六年の面諭としている點について、その面諭にみえてゐる皇儲問題は甚だ曖昧であるという。すなわち王氏がこの遺詔中にみえてゐる面諭を懷疑に當るものとしてこれこそ雍正の作偽とし雍正篡位を證明するものとしてゐるところに問題があると考え、この康熙の遺詔は皇帝の名義を用いてゐても實際には均しく閣臣の草擬に由つてゐることは疑いがなく篡位と關係がないというのである。

次に允禩易名説について前著でも王鍾翰が取りあげていた十四阿哥の原名は胤禛であり雍正即位後允禩と改名した點について十分検討されてゐなかつたが、馮爾康が故宮史料を利用して新たな見解を提出したことに注目する。すなわち馮氏は十四皇子の原名は胤禩であり、後に康熙が胤禛に改名させ、雍正繼位後又原名に恢復したといふのである。ところで馮氏が利用した史料が『宗室玉牒』であるが、氏はこれは最も原始的で權威的であり信度極めて高いものである

るとするのであるが、氏は馮氏のこの史料についての見方には賛同しない。氏はこの康熙玉牒に於ても雍正の改抄があったとし、ここから十四皇子が允禩と稱したのは改名であつて復名ではないという。續いて一九八〇年、于友發著「從皇帝到公民」を読み、その中で溥傑が雍正篡位の確實證據を大内で發現したことがのべられているのをみてその眞偽確認の爲に訪中を決意する。すなわちその著の中に溥儀・溥傑兄弟が幼時養心殿で遊んでいた時に偶然一つの匾額を見つけ、その後面に一卷紙が露出しており、それを開けてみると康熙の遺詔であり親筆で「授位十四子」と筆寫してあったとある。

このことについて社會科學院薛瑞祿が「溥傑關於雍正殺弟的碑資料」と題してこの問題を論述したので學界で注目される。氏は訪中し溥傑と直接面談した後自らの見解を公表するが、それによると雍正帝に殺弟の密詔があつたとしても、すぐに撤回毀滅するであらうし、珍藏して後世に留めることがあろうか、もし生前に毀滅に及ばなくとも乾隆は發見後ただちに銷毀するだらうし、たとえ乾隆が毀棄せずとも養心殿東廂房佛龕中に陳列することがあろうかと反論する。一九八五年氏は溥傑と北京で會ひ康熙の遺詔について問うが、溥氏は是は誤解であるとも言ひし、殺弟密詔に當るものとしてもみており薛氏の見解と大同小異であつた。氏は結論として殺帝の密詔は存在することは不可能であるし溥傑の童年の追憶が傳説と混合しているとのべ、氏の疑問は解決するに至らなかつたようである。

以上第一類は氏が最も重視する雍正繼位の問題についての研究であるが、氏は篡位説が定説化することに大變懸念してその繼位の正當性を力説されたものである。この問題については宮崎氏の名著『雍正帝』の中で兩説並記の形で記されており、現段階ではその眞

實はやはり闇の中にあると言わざるを得ない。但、一つ言えることは雍正が即位後大變有能な君主として治政を遂行したことは事實であり晩年の康熙がそれを見ぬいて雍正を繼位させたとする氏の説はあながちまちがっているとはいえないと思う。それに雍正は殘酷でしかも陰險であり、だからそれが篡位に結びつくという研究者の見解はどうであらうか。これは君主の資質を人間の性格面からみている観があるし、また雍正の性格を殘酷で陰險であると言ひきることにも問題があらう。それよりも君主政治にとって重要なことは統治能力のある有能な人物を君主にすることが重要なことであつたであらう。しかもその君主の地位が皇族間の争いによつてきまり、各皇族を支援する貴族・官僚の朋黨争いまで引きおこすことになれば、君主政治をゆるがすことになる。清朝の場合は當初は有力な皇族・貴族集團の推薦により皇帝の地位が承認されるという部族國家時代の慣習が残っていたのでこれが君主交替期に黨派争いの原因となつていたのでそれを熟知していた康熙帝が中國式の立太子方式を採用しようとしたが、そこでも立太子をめぐる皇子間の争いが起つたので皇太子を有能な一人に限定しようとしたことは十分あり得よう。

しかし問題は澤山いる後繼者候補者の中から一人を選ぶ方式である。この一人として康熙が選定したのが胤禛(後の雍正)か十四皇子允禩かということをめぐる議論が分かれている。この問題をめぐる新資料が續々發見されて兩説は益々深化していくであらう。孟森以來雍正篡位説を主張する研究者は今のところ新資料を利用して自説を補強しているが、そんな中で氏は新資料によつて雍正繼承の正統性を寧ろ確信されたのである。この問題について筆者は今のところ兩説並存の段階からでいてない。が、どちらかといへば本著を

讀む限りにおいて氏の見解を支持したい氣もする。その理由は雍正即位後の十三年間の治政は、君主獨裁者として最高の能力を發揮したものであったのでその點を生前の康熙が豫知していたというのは十分考えられるからである。雍正が即位後朋黨を嚴禁したのもかか有能な康熙にしても朋黨に悩まされていた點を觀察していたことにもよっているし、また太子密建法を始めたのも皇太子による後繼者争いを防止するためであつたし、これ以外にも雍正が天下の庶務を周知する爲に始めた奏摺政治や、行政・財政・軍事等凡ての面における諸々の改革等により國內政治の安定をもたらした功績などを考えてもその後繼者としての資質は十分あつたものと思われる。これらの點について氏のまとまつた見解はまだみられないので今後の研究に期待したい。

第二類は新たに發掘した新史料を利用して雍正の新たな人間像を描き出そうとしている。

特に北京第一歴史檔案館珍藏の「活計檔」より取材している。氏によると帝王言行を記録した「起居注冊」は、第一資料ではあるが日官が自分で筆をとって直書してないので皇帝の眞の面貌を窺いみることはできないがその點「活計檔」は宮廷中の御用作坊の工作記録まで記されており、雍正の嗜好・性格及び起居作息の一面を反映しており、過去の錯誤の見方を糾正できるといふ。すなわち官書には雍正を評して典型的な政治動物であり、またその生活も節儉であつたと記されているが、この密檔によると帝には奢侈・豪華な一面もあり、生活情趣を重視して文物・珍玩・外國の異品を網羅していたし、イタリアの畫家郎世寧に命じて犬・虎・棋盤・家具などを畫かせていたという。中でも雍正が享樂を講求したのとして圓明

園をあげ、その設計、經營すべてに係つていたことも指摘する。尙お圓明園については中國最精華の文化遺産であり、これを英佛がやきはらつたことは大變殘念であり一日も早い復元を期望している。

また雍正は書を愛好し康熙の餘風を受け、秀逸遒勁の行書によって大内養心殿中の幾多の匾額に揮毫した點をあげ、藝術にも造詣が深かつたことも指摘している。ここから氏は雍正が殘酷陰險であつて日夜政務に忙しくのんきに暇をつぶして楽しむ氣持が少なかつたという見方は當らないという。氏は本書の表題を「揭開雍正皇帝隱秘的面紗」としているが、この二類の記述こそ氏の新たな知見として公表したからであらう。雍正篡位説を主張する論者が雍正は殘酷陰險でありここから殺弟してまでも帝位を篡奪したという人間像を描き出していることに對する反論として敘述された感もある。

ところでここで使用されている新資料「活計檔」は、以上のような雍正の私生活のすみずみまで微に入り細に入り檢證することだけでなく、所謂「宮中檔」「軍機檔」「起居注冊」等といった官書に依據して論者が作りあげてきた雍正の繼位・暴亡・私生活に至るまでのまちがつた見方を是正したという考えも當然あつた。特に雍正が即位後九カ月にして立即に繼承人を選定するが公開せず親書密旨を黃紙で固く封じ錦軍内に貯え乾清宮の「正大光明」の匾後に置いていたことについては康熙立太子の弊害に鑒み、絶対に君權に影響する對抗勢力が出現できないようにしたという意圖にあつた。しかしこれとは別にここで繼承人と選定されていた弘曆(後の乾隆)については論者が主張するように康熙が乾隆を鍾愛していたことによりその父である雍正を立てたという説もあるが、これは當らないのべ、これはあくまで雍正の意思によつて決定したという。また氏は

「活計檔」により雍正の後繼者の一人とみなされていた弘時が既に康熙時代にその寵を失っていたともいう。更に前著で雍正急死の理由を服餌丹藥と推定していたことについて、これが學術界で稱賛されたがまちがって引用されている点もあるので今回更に検討することにしたという。雍正の死因については神史野史の呂留良の孫の呂四娘の刺殺説もあったが、これは信すべきでないとし丹藥中毒説をとった。その理由は雍正が康熙以上に方術を嚮尚し、儒・佛・道の三教を同原として強調し、道教の煉丹を愛好していたし、斗壇を設け神靈を祭祀し道士にお祈りさせる齋醮を實施していたが、以上のことが「活計檔」に見られる。ここから丹藥中毒説は信するに値いするといのである。すなわち雍正朝齋醮が何時に始まるかは官私資料は闕如しているが、「活計檔」には祭祀用品も調達することまで記載されていたところから自説の確證を得ている。

以上氏が「活計檔」を資料として從來の自己の學説を一步進めた點はそれなりに評價できる。それと共に「活計檔」のような私生活に關する資料を驅使して雍正の人物像まできこんだ研究は今まで皆無であったのでそれに挑戦した氏の研究姿勢も興味深いものがある。氏ものべているように雍正の人物像としては皇帝になるために凡ゆる策略を用い、なつてからも自己の地位を保持するために競争相手であった皇子を次々に抹殺した冷酷無比な人物として描くという極端な見方から始まって、そうでなくても皇帝として政治のみに没頭し文化生活など殆んど關心がなかったという政治的動物としての見方もあったが、氏は雍正には藝術・文化を愛好し、圓明園のような文化遺産を後世に残したこと、また死の直前まで道術によって自己の生命維持を圖るような生身の人間のもつ弱さなどもあり、決して

獨裁君主として權力のみに執着していないことを明らかにした。

第三類は歴史と紅學との關係について論述する。紅學とは紅樓夢研究學のことである。紅樓夢の作者曹霽（號は雪芹）は江南織造であった曹寅の孫である。曹寅は康熙帝の包衣として重任され、ここから曹家は一時流盛になるが、その子曹頌の時に雍正によって汚職の罪のため斷罪され曹家は没落する。この曹頌の子の曹雪芹は乾隆時代になって「紅樓夢」という時代小説を書くが、ここには滿洲高級貴人の華やかな生活と没落した一族のことが描かれている。ここから曹雪芹が「紅樓夢」を書いた意圖が其後の研究對象になり、清末から民初にかけて王國維の『紅樓夢評論』や胡適の『紅樓夢考證』等の研究書が公刊されていたが、人民共和國成立後、周汝昌の『紅樓夢新證』という大作が公表される。この著は曹家の宗譜や、地方志、文集等を利用して曹家の歴史を克明に再現した「紅學」研究の必須のものとなった。この著の引論で周氏は康熙の立嗣をめぐる皇子の争いが激烈を極めたが、胤禛が強暴手段を用いて目的を達したこと、雍正は即位後恐怖政治をなし清朝封建統治中の最も残酷な時期であったとまでのべている。そして曹雪芹は雍正によって斷罪され没落した曹家の歴史をこの著作で書いたものとし、ここには雍正の篡位が立證されているといっているのであるが、氏はこの周氏の説に對して問題があると指摘する。すなわち周氏が雍正篡位の根據としている康熙實錄を編纂した張廷玉が大事を削除しその爲實錄の卷數が少なくなったことを理由としている點はありえないという。氏によれば康熙實錄の卷數が少いのは篡位と關係はないとし、實錄纂修者には馬齊を首に纂修官は三十餘名もあり、そんな中で衆議を排して史實を竄改することができようかという。

また周氏が胤弼を陷害して奪位を助けたラマ僧に巨大な佛寺雍和宮を作ったというのも根拠がないし、次に雍正の奪位にあずかった力があつたとされる年羹堯についてもそんな協助は一つもなかったと反論する。また周氏が雍正の信任する鄂爾泰、李衛、田文鏡について、鄂は藩邸時代から相識った関係であつたこと、李も亦藩邸の人であつたこと、田も亦王府中の莊頭であつたこと、いずれも雍正と深い関係のあつた人物であつたとしているが、これらはいずれも事實に反しているという。次に周氏が皇子の序齒問題について、胤禛は四子でなく十一子であり、これが彼の矯旨登位の陰謀と関係があるとしてゐるのに對し、氏は主に「玉牒」の記述を根據に雍正は康熙朝に於て自己の排行が第四であつたことを知らないというのは學術根據はないとされる。また周氏が「大義覺迷錄」を廢棄したのは雍正とされているのに對し、氏はこれの講解を停止し流通を禁止したのは乾隆であると反論する。「大義覺迷錄」については前者で氏はこの著が矯詔纂立説の根據とされているのに對し、世宗の自辯は正に本人の清白無辜に因つていて才毫も諸を世に公にすることに忌憚無かつたとあるようにその見方は一貫している。従つてこの自辯をもち出して雍正の篡位があつたとする學説を批判しており、ここから雍正がその篡位の證據となることを恐れてこの著を廢棄したとする周氏の説に賛同しなかつたのである。

次に霍國玲等著『紅樓解夢』がのべている曹雪芹が雍正を毒殺したという内容について世に比類のない奇聞であるが多くの評論家の絶賛をおびているのでだまってみてゐることができないと反論する。すなわちこの著でまず曹雪芹が雍正を憎恨したのは雍正が曹家を清算した際に曹天祐（曹寅の孫）心愛の人竺香玉を奪つたので曹

と竺が合謀して殺害に至つたとのべている。この「解夢」がのべている恩怨説に對して氏はあくまで著者の想像であつて確かな證據はないという。すなわち「解夢」採用の史料の來路は明らかでない上に特に氏の著作『雍正帝及其密摺制度研究』の一節であるへ雍正平素服餌丹藥、因而喪生等語を引用しながら一字の注釋をつけないのは「知識權」の侵犯であるともいう。特に「解夢」が雍正の暴斃の謎として人に丹砂を進められ毒死した點について、その主謀者は曹雪芹と竺香玉であるとし、竺は皇帝身邊の人であるので親ら丹藥を奉ずることができるとしているのは荒唐無稽の謬論であるという。このような霍説は學術面からみて根據のないものであるだけでなく人情の常識からみて受け入れ難いものがあるという。すなわち曹家が沒落したのは公帑を虧空したことに因つており個人の私怨ではなかつたし、曹家は斷罪された後も曹雪芹は皇家の府學で讀書できる優遇も受けており骨髓まで恨むことがあつただらうかという。また香玉の事についても雍正と關つたということもないし、秀女を選ぶのも例行公事であつて雍正が何人を進貢させるかを指定するようなことはなかつたもののべ、霍書の言うように雍正殺害のため竺が宮中に送りこまれたという説を全面的に否定している。氏は「解夢」が社會をわきたたせるようなものでないとしても、高水準の學術的著作を要求する點から、この書に對する謹嚴・公正な書評を求めるのである。

次に二月河の『雍正皇帝』についてみると、これは歴史故事をみない翻閱小説ではなく著者は頗る清史資料を読み歴史を闡明して根據のあるものとなっている。しかし歴史小説にあつても實在の人物の描寫には一定の拘束を受けるものであり、その點に本著は問題が

あるという。例えば河南巡撫田文鏡の幕客であった鄺について彼が中心となって壁臣隆科多を疏劾したというのは派手な見解であろう。更に鄺は康熙三十六年雍正の爲に策略をめぐらし嗣位を謀り、雍正繼統後飄然として去って最後に田文鏡の幕客となったという人のよりどころもないことをのべているのも問題である。また李衛仕官の理由に作者は李が雍親王府に賣身した傭僕であったとしているが、これも事實と大いに相違している。史書によれば李衛の先世は明初に軍功を以て起家し錦衣衛になっていたこと、康熙五十六年賞を出し捐納により兵部員外郎となった経歴であり、小説で李衛の出身は不明と書いているのは問題がある。

次に田文鏡与李絳が應考したとあるのは非常に滑稽なことであり、田は異途出身で科甲の人物ではない、早く康熙二十二年二十二歳の時に監生を以て福建長樂縣縣丞となり累遷して康熙四十五年京任吏部員外郎に調任され、此後十六載ずっと中央に留っていて李絳と共に應考するようなことはなかったという。氏はここで雍正朝は異途出身と科甲入仕の兩種の門戸があり其後の種々發生の事件にはこの科甲人士が結黨して異途出身者を排除したことでおこっており、ここから途を異にする李と田が共に科擧に應じたとするのは史實に合わないだけでなく當時の歴史背景にも逆行しているという。

また李絳は張廷玉の門生でなく受業もしていないのに張の門生としているのもおかしい。この張廷玉も雍正暴斃の時、數名の顧命大臣中の一名で小説が記す皇帝第一の幸臣で宰相であったとしているのも時代錯誤であるという。次に雍正繼承問題については孟森・王鍾翰が雍正篡奪説を提唱して數十年定説となっていたが、氏が『雍正帝及其密摺制度研究』の中で疑問を提出して以來本著は繼統は康

熙遺命より出たとのべており、氏の見解と相合している點を指摘する。但し小説中に方苞が康熙の最高の知恵袋であり、雍正の繼阼も方苞の一言に出ているというのはいりやうないという。また康熙が孫の弘曆（後の乾隆）を特に可愛がりここから雍正に傳位したという朝鮮史料は根據なく雍正の密建皇儲法はあくまで獨創であること、また雍正の突然死について丹藥中毒説に賛成しているものの曾て十四弟側室であり後雍正に歸した一少女喬引娣を造出し、彼女が剪刀で自殺し雍正も同時に自盡したとしているのは情理に合わないことであるという。かくして氏は結論として小説は學術專著でないで思いのまま書くことは許されるという考えもあるが、歴史小説の場合は歴史上存在する人物について眞實を離れて純ら想像にまかせて書くのはどうかという。その理由は小説といえども百萬部以上の巨作となれば讀者に與える影響は大なるものがあるので人物描寫については十分な檢證が必要であるというのである。

以上第三類、第四類で氏は歴史と紅學、歴史と小説との關連性についてのべてきたのであるが、ここでの氏の見解は文學作品・小説といつても眞實を曲解するような敘述に對して嚴正な反省を求めるものであった。氏のいう眞實とは雍正帝繼統をあたかも篡奪したかのように敘述することに對していつており、雍正繼統は公正なものであるという立場である。先述したように雍正篡奪を敘述した紅學研究者は孟森以來の清史研究者の路線にそつてのべており、その點ではこれ等歴史家と一體である。しかし氏は紅學研究者がそれをするのみして雍正篡奪を眞實であるという前提にたつて論を展開していることに對して疑問を呈示するのである。特に紅學研究家の最高權威の周汝昌が凡ゆる資料を驅使して雍正篡奪を實證したことが學界

に多大な影響を与えているのでこの牙城に對する果敢な挑戦を試みたといえよう。筆者としてはこの氏の反論は雍正纂奪の事實のなことを綿密な資料によつて實證的に研究している點で一應の理解はできる。従つてこの氏の反論に對して今後紅學研究者が氏の論著を十分通讀した上で新たな知見を呈示されることを望むものである。

但氏にも期待したいのはそれならば紅樓夢の著者曹雪芹がこの作品を書いた意圖はどこにあったかを明らかにする必要がある。これについては清末から現在に至るまで多くの研究論文もありその學說を整理することがまず肝要であらう。その上になつて氏の紅學論が提示されるべきであらう。次に氏の言うように小説といつてもそれが讀者に與える影響が大であるというのはその通りである。ここから歴史研究と歴史小説との關係を指摘された點興味深いものがある。歴史小説の場合雍正帝の人物像を冷酷無比な人物と描寫することも可能であらうが、その點のみ強調したならばそれが帝の人間性のすべてを表現するものになるだらう。しかし氏が提示した「活計檔」にあるように藝術を愛好する趣味豊かな一面もあつた點からだけみてもその人間觀は多様な側面もある。従つて歴史小説といつてもこのような新資料に基づく歴史研究がなされている以上それを加味したものがあつてもよいのではないかと思われる。しかし何といつても雍正を帝位篡奪者とみるかみないかは歴史研究上の論點の分れ目になっているとしたならば、その兩説を十分検討した上で小説を構成する必要は歴史小説家といつてもあつてはしい。

次に第五類で氏は故宮の密檔を論じ、これが雍正史と密接な關係があることを指摘する。その中の第十九篇「北京と臺北珍藏の硃批諭旨」の原稿の異同では、兩地所藏の檔案をもつて對比し所見をの

べている。この種の比較研究は尙まだ學者が試みたことのなかつた分野でありそれに取り組んだのは評價できる。この研究の契機は氏が參加した京大人文科學研究所での「雍正硃批諭旨」研究會であり、この會で啓發された氏は諭旨の原本を求めて臺灣の故宮博物院に行き六十年代末期より八十年代中期に至るまで取材し、其後北京の第一歴史檔案館に移つて該館所藏の雍正初年の硃批文獻四千件に當つた。その結果年希堯の奏摺を例として北京のそれが原件であつて臺北のは添削された修訂稿であることに気づき、原件では書き方が大變生き生きとして口語も多用しているが、修訂稿ではこの原件の生動と活潑さは消失していて硬くなり型にはまつた官樣文章になつたと指摘する。次に第二十篇「慎防檔案作偽」では康熙朝の官方文書と私人記載の兩文獻を例として史料比較を行っている。その結果官方文書は私人記載に比べて系統があり量の面でも多い點では喜ぶべきことであるとのべ、官方文書について検討する。すなわち官方文書は官書と檔案に分類できるが、官書は旨を奉じて編纂した文獻であり多くは印行成書したものである。檔案は以前陳援庵が定義したように未成冊の史料といえる。氏はこの未成冊の後に「未梓行」を加えるのが適當であるという。檔案は人爲の取捨選擇をへないもので比較的信ずることはできるが、官書は大いに文書の文字を改竄することがができる點注意すべきであるという。そこで氏は刊本「硃批諭旨」が印行される前の奏摺である原始檔案を比較検討し、刊本が公刊される際に檔案が纂改された例があるとし、蔡珽の奏議をあげている。そしてその理由は「硃批諭旨」編集時蔡珽が罪により獄にあつたことと關係しているという。其他岳鍾琪の例、賈士芳の獄、趙鳳詔の獄などについて考察している。

次に二十一篇「雍正寵臣鄂爾泰」について雍正朝寵愛無比といわれたこの人物について「硃批諭旨」の改竄問題と関連させてのべている。この問題については前著でもふれているが本著で一層深く検討している。氏は密摺中の一部分は乾隆三年に刊行された「雍正硃批諭旨」であるが、この書の価値は高いものがあり官書の原始資料に見えないものを保存しているとし、密摺を閲覧すると雍正が明に嚴君であつて臣下に敢て隱蔽欺瞞するようなことはなかった。しかしこの書版前に竄改がありこの刊本の「雍正硃批諭旨」は原來の面貌ではない。幸に原件は尙臺北故宮博物院に保存されているのでこれを見ると本來のものがわかる。更に鄂爾泰は雍乾兩朝最も寵遇を受けた大臣であつたので密摺の原稿を保存できたし、以後又自己の文集中に載せることができた等々のことをのべている。氏は鄂爾泰について雍正初内務員外郎の微職にあつた者が雲貴總督になり以後破例の優遇を受けたのは彼の品格、學養、見識に關わつていゝとし、彼の功績としては雲貴總督任内に苗亂を處理し改土歸流の政策を實施したこと、また江蘇布政使任内にあつて紫陽書院を再建し人材を育成するなど文教政策を促進したこと、また水利を興修したり蘇松浮糧を免除したり、蘇松常三府に公使銀を分發して買穀し賑貸に備えた等々のことをあげている。

以上第五類は雍正史研究において刊本「硃批諭旨」と原本「檔案」を比較検討することが肝要であることを強調しているが、このことは全く異存のないことである。現在京都大學人文科學研究所では刊本の「硃批諭旨」の講讀を完了しその詳細な索引を作成したことににより學界に裨益するところ大なるものがあり、この講讀の過程にあつて研究された論稿は雍正史解明に貢獻するものとなつた。と

ところでこの刊本講讀の過程でそれまで未公開資料であつた檔案が續々刊行されたことは、雍正史研究に更なる貴重な資料を提供することになつた。ここに檔案と刊本を比較検討することが必須となつてきたが、これを先がけてとりくんだ氏の功績は大いに評價されるものである。しかしこの膨大な資料の比較研究には氏一人にまかせるには相當困難なことであらうし、願わくば専門家による組織的な研究も考えられてはよいのではないかとも思われる。ところで前著では既に雍正政治を支える三羽鳥といわれた田文鏡・李衛についてその行政を檢討されていたが、本著では更に鄂爾泰の行政についてもべられてゐる。雍正の行政を論ずる時雍正が特にこの三官僚の行政を何故重視していたか解明することが重要であらうし、今後の課題としてはぜひこの三官僚の行政の更なる分析を行われることを期待したい。

以上本著を通讀して氣のついた點をのべてきたが、總じて筆者は著者の雍正帝の實像を解明することに情熱をささげているその執念にまず敬意を表するものである。この著出版によつて更なる雍正の實像に迫る論著が續出することを期待したい。しかし全體として雍正帝篡奪問題とそれとの關連で密摺問題を解明することに重點が置かれたため雍正政治の研究にまで十分に及んでいない點に少し物足りない感もある。但、このテーマ自身學界においてまだ十分な研究成果をあげてゐるとはいえない面もあり、かつて京大人文研の「雍正硃批諭旨」研究班が始めた研究に續くものがでることを望むものである。これは雍正史研究者に課せられた課題であると思うものである。

二〇〇〇年一月 香港 商務印書館
A五判 六五二頁 三九五〇圓